

京都市内の埋蔵文化財 発掘調査速報 No.001

きたしらかわはいじ 北白川廃寺の発掘調査

調査期間：令和2年 4月6日（月）～ 4月22日（水）
調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 発掘調査について

北白川廃寺は、京都市左京区北白川大堂町を中心として広がる、周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）です（図1）。北白川廃寺は、7世紀後半に建立された古代寺院で、これまでに建物の基壇や回廊などがみつかっています。京都市では北白川廃寺を重要遺跡として定め、通常よりも厳しい基準に則って、指導を行っています。今回、遺跡の北西部において住宅の建設が計画されたため、京都市が発掘調査を行うこととなりました。

2 北白川廃寺について

北白川廃寺は、出土した瓦や土器などから7世紀後半に建立されたと考えられています。伽藍配置について、現在の白川通を挟んだ東側の段丘上に金堂、西側に塔が存在したことが明らかになっています（図2）。金堂・塔は、ともに瓦積みで基壇化粧を行っていました。金堂基壇は東西36m・南北23mの大規模なもので、回廊に囲まれていました。その規模は、当時の中心地であった奈良の山田寺・法隆寺などよりも大きいことが明らかになっています。金堂瓦積基壇の一部は、京都大学総合博物館の東側に移築されており、往時の姿を想像することができます。

一方、塔基壇は一辺約14mの正方形で、法隆寺五重塔基壇とほぼ同規模です。数度の修復を経て、最終的には石積み基壇に改修されていました。

なお、北白川廃寺の南隣には小倉町別当町遺跡という集落遺跡が存在します。7世紀後半の竪穴建物が多数確認され、北白川廃寺の軒瓦も出土しており、北白川廃寺と密接な関係にあったと考えられます。

3 今回の発掘調査成果

北白川廃寺では、これまでに計11回の発掘調査が行われており、今回の調査は第12次調査となります。北白川廃寺の存在が明確になった第1次調査（1934年）では、金堂基壇が良好な状態で検出されました。その後、第2次調査（1974・1975年）では、金堂基壇の西約80mの地点で塔基壇と心柱の痕跡が確認されました。

塔跡のすぐ北側で行われた第6次調査（1992年）では、東西方向の2列の柵列と、その北と南にそれぞれ幅約2mの東西方向の溝（北溝・南溝）、掘立柱建物などが検出されました。今回の発掘調査地は、この第6次調査で確認された2条の溝のうち、北溝の延長線上に当たります（図3）。

今回の調査では、東西方向の溝を計3条確認しました。溝1・2（図4）については、第6次調査の北溝のほぼ延長線上で確認することができました。ただし、北溝と異なり、いずれも幅は約1mほどと狭くなっています。さらに、溝2の北側で幅1～1.5mの溝3を検出しました。溝1～3からは、瓦はほとんど出土せず、7世紀後半の須恵器や土師器が主に出土しています。現時点では、溝1～3に大きな時期差は認められないため、同時期のものかどうか今後検証が必要です。

また、北白川廃寺では、金堂や塔の軒先を飾った軒瓦として複数の種類の瓦が確認されていますが、今回の調査で初めて素弁十弁蓮華文軒丸瓦を確認しました（図5）。京都市内の古代寺院では、北区北野白梅町付近に存在した北野廃寺で、同種の瓦が確認されています。今後、この瓦の性格も含めて、検討を進めていきます。

（熊谷 舞子）



図1 遺跡位置図

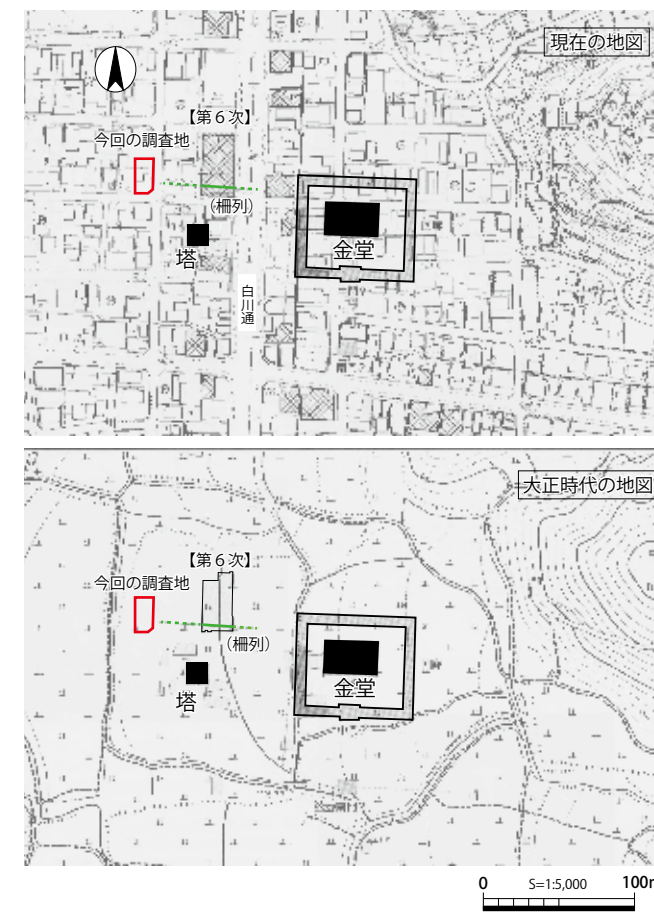


図2 北白川廃寺の伽藍配置（堀 2010 を一部改変）

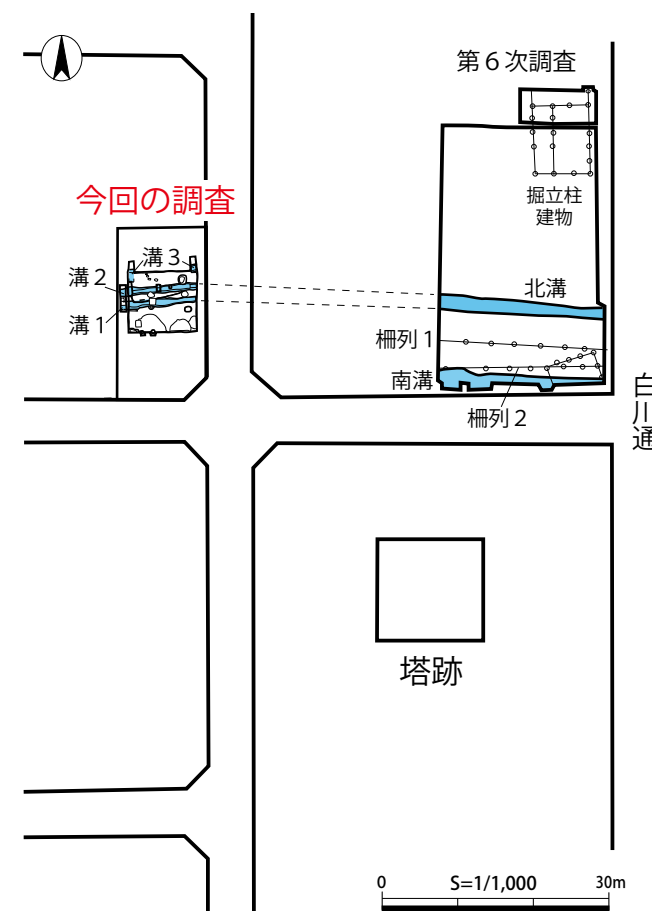


図3 発掘調査平面図



図4 調査区全景（西から）



図5 出土した素弁十弁蓮華文軒丸瓦